

Ⅲ 授業計画表（シラバス） －博士課程－

授業科目名	複合芸術研究法	担当教員名	科目責任者：尾登誠一 岩井成昭、志邨匠子
授業科目区分	研究基盤科目		
履修区分	必修	授業形態	演習
配当年次・学期	1年次前期	単位数	1単位
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>博士課程における時限研究は、研究倫理に基づいた的確なテーマ設定と計画性が必須の条件である。いくなれば、研究は、複合芸術という視点で広く社会や世界を俯瞰し、「問い」と「解決」の地平を計画的に描くことで成立する。</p> <p>本授業は、博士課程初期段階における研究の基本的なあり方に対する概論であり、複合芸術に対する深い洞察と新たな知見を獲得するための教育課程やスケジュールの確認を基点に、この後履修していく「複合芸術表現研究Ⅰ」と「複合芸術理論研究Ⅰ」に先立ち、「複合の視点」からの研究活動を概観する。その上で、自身の研究テーマとプロセスを重ね合わせる演習を通じて、グローバルに芸術表現活動を展開するために必要な技術力や表現力を身につけ、かつ自らの創造実践がもつ独自性を、歴史的・社会的文脈において言語化（理論化）し発信する博士像を具体的に想起することを到達目標としている。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>多くの研究は、問題発見を起点とし、それを分析・展開しつつ、その解答を広く社会に応用することでその成果は評価される。授業は、博士研究が学生主体で自由なテーマ設定を前提としつつも、芸術実践（表現研究）と研究論文（理論研究）の相関性・結びつきを理解するための入口として位置付けられる。その概要は、博士課程の教育課程が、複合芸術の視点で拡張と交換行為を試行しつつ、実践と研究を広く社会に応用展開できる能力の醸成に立脚した要素や知恵のステップアッププロセスにより組み立てられることを踏まえ、自らの研究テーマと研究計画がそのプロセスの中でどのように進行していくのかをイメージし、教員との意見交換という演習形式の授業の中でさらに具体化させていくものである。</p> <p>また、そのポリシーは、既成概念に捉われない着想力や創造活動であり、目的意識の明確化、研究の目的と方法への柔軟な思考など、博士研究を成立させる要素を紹介するとともに、社会貢献へのビジョンを授業の中で考察していく。</p>			

授業計画

第 1 回～ 2 回 ガイダンス（尾登誠一）

複合芸術研究を開始するにあたり、博士課程の教育課程と研究スケジュールを確認・理解する。加えて、研究を進めるうえで必要となる博士のコンプライアンス、研究倫理と行動規範、オーサーシップ、社会的要請などを理解する。

第 3 回～ 4 回 複合芸術が目指す領域横断性と独創性（岩井成昭）

テーマに基づく複合芸術の研究をより明確にイメージするため、既往研究事例（作品事例・論文事例）などを参照しながら、複合芸術の本質である「内的運動」と「外的運動」の併走によって具体化される領域横断性と独創性を理解する。

第 5 回～ 6 回 研究・分析方法（岩井成昭／志邨匠子）

博士課程で進められる研究工程をより具体的に想定するため、テーマ設定、仮説設定、事例・文献調査、プロセス論、フィールドサーベイ、分析方法、展開方法、評価方法を理解したうえで、教員と意見交換をしながら、自身がどのような工程で研究を進めるべきかを考察する。

第 7 回～ 8 回 表現研究と理論研究の概観（尾登誠一／岩井成昭／志邨匠子）

複合の視点からの要素分析を通じた仮説の設定と、具体的な実践を基にした表現手法の検証など、表現研究と理論研究の相関的プロセスの過程で行われる自らの研究をイメージし、その概観を成果としてまとめ、複合芸術を基点とする理論に裏付けされた表現の拡張性と交換性を考察する。

履修上の注意

本授業は短期・集中的に行うことに留意すること。

テキスト

授業内で必要となるテキストを適宜準備する。

参考書・参考資料等

授業内で必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する

学生に対する評価

授業への取り組み 演習内での意見発表等 総合的に判断する。

授業科目名	複合芸術表現研究 I	担当教員名	科目責任者：岩井成昭 尾登誠一、小田英之、藤浩志、 今中隆介、岸健太、飯倉宏治、 萩原健一、服部浩之
授業科目区分	研究展開科目		
履修区分	必修	授業形態	演習
配当年次・学期	1年次通年	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ <p>本授業では学生各自の研究テーマに立脚する芸術表現とその方法論構築のための指導を行う。ここで云う芸術表現とは「複合芸術」としての研究及び実践による作品制作のことである。また、各自の研究テーマの最終形態として、素材やメディアを必要とする実制作＝作品を主体とするのか、調査・研究からなる理論＝文章表現を主体とするのか、によって、本授業が各学生にもたらす成果は変化すると思われる。しかし、どちらの方向性を持つ学生にとっても、多様な表現を客観的に捉え、分析することは必要である。そのためにテーマ設定・考案に始まり、表現研究の帰結として作品制作を実践することを前提に、そのために必要なプロセスに沿って授業を進める。</p>			
授業の概要 <p>本授業は「複合芸術理論研究 I」と隔週の交代開講であることを踏まえ、各自の研究テーマの絞り込みと並行して、テーマに即した表現の研究方法を学び、作品制作のための基盤を作る。</p> <p>1年次前期には、研究テーマの設定に重きをおき、そのための表現的な裏付けに関わる専門領域についての指導を行う。後期は、具体的な研究方法と作品の制作を指導する。授業の最終週までに、客観的で理論との整合のとれた表現の成果を提出することを課す。</p>			
授業計画 <p>第 1 回 ガイダンス・担当教員 2 名の配置</p> <p>第 2 回～ 3 回 表現となるテーマの探求・発見および背景の調査</p> <p>第 4 回 先行作品、類似的表現へのリファレンスと分析</p> <p>第 5 回 研究テーマの提出と意見交換</p> <p>第 6 回～ 8 回 表現手法、方法論の選択、素材・メディアと技術の考察</p> <p>第 9 回～13 回 制作実践時における課題の想定と解決</p> <p>第 14 回 効果的な設営（状況設定、空間構成、時間的条件）</p> <p>第 15 回 パブリシティーと情報提供、自己評価</p> <p>担当教員の研究テーマは次のとおり</p> <p>（尾登 誠一）機能デザインをベースとした総合的なデザイン論を踏まえて、科学と芸術、文明と文化という関係性の間にある価値基準を、精神と物質の相乗性として捉え、生活様式を軸にした多様な領域を横断しながら、モノ・コト、起業を含めた社会そのものを対象とする表現行為であるソーシャルデザインに関する研究指導を行う。</p> <p>（小田 英之）ビジュアルアートの視点に複合の観点を加えながら対象を読み解いたうえで、絵画や</p>			

イラストレーション、CGをベースとしたグラフィックデザインなどのメディアを効果的に活用した複合的手法を通じて、表現の拡張を試みる研究指導を行う。

(藤 浩志) 立体造形やコミュニティアートなどの表現手法と、文化イベントやアートプロジェクトの実践を踏まえながら、そうした取り組みを複合の視点から解釈し、過去の常識や経験則にとらわれないアートプロジェクトの実践に関する研究指導を行う。

(岩井 成昭) 現代芸術におけるリレーショナル・アートやソーシャリー・エンゲージド・アートなど、社会や地域に多様な価値をもたらすプロジェクト型アートを、その構成要素や構造に着目しながら理論的な裏付けをもって立案・展開していく手法に関する研究指導を行う。

(今中 隆介) モノを作る表現行為が、アート、デザイン、エンジニアリング、サイエンスの統合(複合)によって成り立っていることを踏まえ、プロダクトデザインやものづくり、社会を俯瞰するデザイン思考に基づく制作・提案やプロジェクトの組成・実践に関する研究指導を行う。

(岸 健太) 地域や企業を含むコミュニティを対象として、それらを構成する多様な要素の動的な相関に着目し、アーバン・スタディーズの視点から、プロジェクトなどの不断に変化する表現の可能性と、それらを裏付ける仮説・検証を通じた表現と理論の具体化に関する研究指導を行う。

(飯倉 宏治) 情報科学の視点から、ITと芸術の複合による新しい表現や概念、考え方を掘り下げることで、情報技術の高度な活用と芸術の間に生まれる未知の表現領域の拡張と理論化に関する研究指導を行う。

(萩原 健一) 対象物や対象地域に応じた映像表現の複合的な活用を通じて、メディアによる地域・人・事柄をつなぐ可能性を探究し、その際に生じる「新しい例外」にも着目しながら、従来とは異なる地域課題の解決手法や表現領域の拡張に関する研究指導を行う。

(服部 浩之) キューレーションの視点から、無意識な行為の意識化などを通じて、社会の中で新たな視点や価値を掘り起こし、理論に裏付けされた表現によって芸術に転換するプロジェクト及びアートマネジメントの展開とその理論化に関する研究指導を行う。

履修上の注意

全体で行う発表などの他は、原則個人指導で行うため、2名の担当教員とよく相談し授業計画を立てること。

テキスト

授業内で必要となるテキストを適宜準備する。

参考書・参考資料等

授業内で必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する

学生に対する評価

個人指導での評価、研究制作や研究発表など、総合的に判断する。

授業科目名	複合芸術理論研究 I	担当教員名	科目責任者：志邨匠子 白杉悦雄、岸健太、飯倉宏治、 石倉敏明、服部浩之、唐澤太輔
授業科目区分	研究展開科目		
履修区分	必修	授業形態	演習
配当年次・学期	1年次通年	単位数	2単位

授業の到達目標及びテーマ

本授業では、論文を執筆する上で必要となる理論構築のための研究方法についての指導を行う。各自の研究テーマが、表現を主体とするのか、理論を主体とするのか、によって最終的な成果のあり方は異なるが、理論的に思考し客観的に文章化することは、どのような研究テーマであろうと必要である。したがって、(1)研究テーマと論文との関連づけ、(2)各自のテーマに基づく理論的な研究方法についての指導、(3)論文の構成についての指導、といった流れを通じ、複合的視点を重視しつつ、論文執筆に向けての基盤を作ることを目標とする。

授業の概要

本授業は「複合芸術表現研究 I」と隔週の交代開講であることを踏まえ、各自の研究テーマの絞り込みと並行して、テーマに即した論文の研究方法を学び、論文執筆のための基盤を作る。

1年次前期には、研究テーマの設定に重きをおき、そのための理論的な裏付けに関わる専門領域についての指導を行う。後期は、具体的な研究方法と論文の構成を指導する。授業の最終週までに、客観的で整合性のとれた小論文を提出することを課す。

授業計画

第 1 回 ガイダンス・担当教員の配置

第 2 回～ 3 回 研究テーマ（仮）の発表と論文計画の提出

第 4 回～ 9 回 テーマに関連した専門領域と関連文献に関する指導

第 10 回～13 回 具体的な研究方法（方法論）、論文の構成について指導

第 14 回～15 回 小論文の提出と指導

担当教員の研究テーマを次のとおり

（白杉 悦雄）現代芸術を中国科学史、中国及び日本の医学思想史、博物学、身体論、哲学等の視点に照らしながら、論理的な分析、哲学的課題の解釈、古典著作の読解など通じた複合芸術の理論化・体系化に関する研究指導を行う。

（志邨 匠子）刻々と変化している現代芸術を、美術史研究の視点から学際的、多元的に考察することで芸術表現への新しい視座を与えるとともに、本学の「複合芸術」が対象とする多様な試みを含めて、その成果検証と理論形成に関わる研究指導を行う。

（岸 健太）地域や企業を含むコミュニティを対象として、それらを構成する多様な要素の動的な相関に着目し、アーバン・スタディーズの視点から、プロジェクトなどの不断に変化する表現の可能性と、それらを裏付ける仮説・検証を通じた表現と理論の具体化に関する研究指導を行う。

（飯倉 宏治）情報科学の視点から、ITと芸術の複合による新しい表現や概念、考え方を掘り下げ

ることで、情報技術の高度な活用と芸術の間に生まれる未知の表現領域の拡張と理論化に関する研究指導を行う。

（服部 浩之）キューレーションの視点から、無意識な行為の意識化などを通じて、社会の中で新たな視点や価値を掘り起こし、理論に裏付けされた表現によって芸術に転換するプロジェクト及びアートマネジメントの展開とその理論化に関する研究指導を行う。

（石倉 敏明）地域を捉える民族誌学的なアプローチと人類史における芸術の役割について考察する人類学的視点により、アート・デザイン・クラフトの三領域の交点に位置する価値創造についての理論化と、実践と思考の相互作用についての研究指導を行う。

（唐澤 太輔）粘菌をはじめとする自然現象の観察と夢やイメージ等の主観的・無意識的省察を複合した南方熊楠を対象とする生命論・宇宙論の視点から、研究テーマの性質や文脈に応じた論文の構成指導や、外的現実と内的現実を横断・複合する実践的方法論についての指導を行う。

履修上の注意

全体で行う発表などの他は、原則個人指導で行うため、2名の担当教員とよく相談し授業計画を立てること。

テキスト

授業内で必要となるテキストを適宜準備する。

参考書・参考資料等

授業内で必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する

学生に対する評価

個人指導での評価、研究制作や研究発表など、総合的に判断する。

授業科目名	複合芸術表現研究Ⅱ	担当教員名	科目責任者：岩井成昭 尾登誠一、小田英之、藤浩志、 今中隆介、岸健太、飯倉宏治、 萩原健一、服部浩之
授業科目区分	研究展開科目		
履修区分	必修	授業形態	演習
配当年次・学期	2年次通年	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ <p>本授業では、「複合芸術表現研究Ⅰ」を踏まえ、引き続き、作品を制作する上で必要となる理論構築のための研究方法、文章表現に係る実践的な指導を行う。</p> <p>(1) 各自の芸術表現における社会的・芸術的コンテキストを明らかにする、関連文献の拡充 (2) 表現手法の再構築 (3) 実践的な制作指導</p> <p>上記のような流れを通じ、複合的視点を重視しつつ、博士課程審査作品制作に向け、複合的視点・手法による独自性の高い芸術表現の実現をすることを目標とする。</p>			
授業の概要 <p>本授業では「複合芸術理論研究Ⅱ」と隔週の交代開講であることを踏まえ、研究テーマに関する表現研究と理論研究の双方向からの仮説検証を行いながら、理論に裏付けされた表現を探求する。</p> <p>2年次前期には、「複合芸術表現研究Ⅰ」により提出された作品および「複合芸術理論研究Ⅰ」を通じて深めた論考に基づき先行事例や関連文献の充実に重きをおき、各自が自主的に制作を進め、さらに1年次で試みた表現手法を再考し、新たな表現を導き出す。後期では、常に指導教員と連携をとりながら、各自のテーマに基づく実践的な制作指導となる。授業の最終週までに、各自、博士課程修了に向けた具体的な制作計画書を提出し、3年次における複合芸術表現の確立へとつなげる。</p>			
授業計画 <p>第1回 「複合芸術表現研究Ⅰ」で提出した作品・論考にもとづくプレゼンテーション 第2回～7回 先行事例、関連文献に関する調査および表現方法の再考 第8回～13回 各自のテーマに基づく個別指導 第14回～15回 制作計画書の提出と指導</p> <p>担当教員の研究テーマを次のとおり</p> <p>(尾登 誠一) 機能デザインをベースとした総合的なデザイン論を踏まえて、科学と芸術、文明と文化という関係性の間にある価値基準を、精神と物質の相乗性として捉え、生活様式を軸にした多様な領域を横断しながら、モノ・コト、起業を含めた社会そのものを対象とする表現行為であるソーシャルデザインに関する研究指導を行う。</p> <p>(小田 英之) ビジュアルアートの視点に複合の観点を加えながら対象を読み解いたうえで、絵画やイラストレーション、CGをベースとしたグラフィックデザインなどのメディアを効果的に活用した複合的手法を通じて、表現の拡張を試みる研究指導を行う。</p>			

(藤 浩志) 立体造形やコミュニティアートなどの表現手法と、文化イベントやアートプロジェクトの実践を踏まえながら、そうした取り組みを複合の視点から解釈し、過去の常識や経験則にとらわれないアートプロジェクトの実践に関する研究指導を行う。

(岩井 成昭) 現代芸術におけるリレーショナル・アートやソーシャリー・エンゲージド・アートなど、社会や地域に多様な価値をもたらすプロジェクト型アートを、その構成要素や構造に着目しながら理論的な裏付けをもって立案・展開していく手法に関する研究指導を行う。

(今中 隆介) モノを作る表現行為が、アート、デザイン、エンジニアリング、サイエンスが統合(複合)されて成り立っていることを踏まえ、プロダクトデザインやものづくり、社会を俯瞰するデザイン思考に基づく制作・提案やプロジェクトの組成・実践に関する研究指導を行う。

(岸 健太) 地域や企業を含むコミュニティを対象として、それらを構成する多様な要素の動的な相関に着目し、アーバン・スタディーズの視点から、プロジェクトなどの不断に変化する表現の可能性と、それらを裏付ける仮説・検証を通じた表現と理論の具体化に関する研究指導を行う。

(飯倉 宏治) 情報科学の視点から、ITと芸術の複合による新しい表現や概念、考え方を掘り下げることで、情報技術の高度な活用と芸術の間に生まれる未知の表現領域の拡張と理論化に関する研究指導を行う。

(萩原 健一) 対象物や対象地域に応じた映像表現の複合的な活用を通じて、メディアによる地域・人・事柄をつなぐ可能性を探究し、その際に生じる「新しい例外」にも着目しながら、従来とは異なる地域課題の解決手法や表現領域の拡張に関する研究指導を行う。

(服部 浩之) キューレーションの視点から、無意識な行為の意識化などを通じて、社会の中で新たな視点や価値を掘り起こし、理論に裏付けされた表現によって芸術に転換するプロジェクト及びアートマネジメントの展開とその理論化に関する研究指導を行う。

履修上の注意

全体で行う発表などの他は、原則個人指導で行うため、2名の担当教員とよく相談し授業計画を立てること。

テキスト

授業内で必要となるテキストを適宜準備する。

参考書・参考資料等

授業内で必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する

学生に対する評価

個人指導での評価、研究制作や研究発表など、総合的に判断する。

授業科目名	複合芸術理論研究Ⅱ	担当教員名	科目責任者：志邨匠子 白杉悦雄、岸健太、飯倉宏治、 石倉敏明、服部浩之、唐澤太輔
授業科目区分	研究展開科目		
履修区分	必修	授業形態	演習
配当年次・学期	2年次通年	単位数	2単位

授業の到達目標及びテーマ

本授業では、「複合芸術理論研究Ⅰ」を踏まえ、引き続き、論文を執筆する上で必要となる理論構築のための研究方法、文章表現に係る実践的な指導を行う。(1)論文執筆に必要な関連文献の拡充、(2)方法論の再構築、(3)実践的な論文指導、といった流れを通じ、複合的視点を重視しつつ、博士論文執筆に向け、明快で、理論的・客観的な文章表現を実践することを目標とする。

授業の概要

本授業では「複合芸術表現研究Ⅱ」と隔週の交代開講であることを踏まえ、研究テーマに関する表現研究と理論研究の双方向からの仮説検証を行いながら、実践的に裏付けられた理論を構築していく。

2年次前期には、「複合芸術理論研究Ⅰ」の最後に提出された小論文と「複合芸術表現研究Ⅰ」の中で得られた仮説の検証結果に基づき、関連文献の充実に向けて自主的に資料調査を進めるとともに、後期初めの博士論文等予備審査会に向けて、1年次で試みた方法論を再考し、新たな方法論を導き出しながら理論構築を進める。後期では、常に指導教員と連携をとりながら、各自のテーマに基づく実践的な理論の構築及び執筆指導を行う。研究の進捗状況を踏まえて、3年次での博士論文授業の最終週までに、各自、博士論文執筆までの具体的な論文計画書を提出し、3年次での論文執筆へとつなげる。

授業計画

第1回 「複合芸術理論研究Ⅰ」で提出した小論文にもとづくプレゼンテーション

第2回～7回 関連文献に関する再調査および方法論再考

第8回～13回 各自のテーマに基づく理論構築及び執筆指導

第14回～15回 論文計画書の提出と指導

担当教員の研究テーマを次のとおり

(白杉 悦雄) 現代芸術を中国科学史、中国及び日本の医学思想史、博物学、身体論、哲学等の視点に照らしながら、論理的な分析、哲学的課題の解釈、古典著作の読解など通じた複合芸術の理論化・体系化に関する研究指導を行う。

(志邨 匠子) 刻々と変化している現代芸術を、美術史研究の視点から学際的、多元的に考察することで芸術表現への新しい視座を与えるとともに、本学の「複合芸術」が対象とする多様な試みを含めて、その成果検証と理論形成に関わる研究指導を行う。

(岸 健太) 地域や企業を含むコミュニティを対象として、それらを構成する多様な要素の動的な相関に着目し、アーバン・スタディーズの視点から、プロジェクトなどの不断に変化する表現の可能

性と、それらを裏付ける仮説・検証を通じた表現と理論の具体化に関する研究指導を行う。

（飯倉 宏治）情報科学の視点から、ITと芸術の複合による新しい表現や概念、考え方を掘り下げることで、情報技術の高度な活用と芸術の間に生まれる未知の表現領域の拡張と理論化に関する研究指導を行う。

（服部 浩之）キューレーションの視点から、無意識な行為の意識化などを通じて、社会の中で新たな視点や価値を掘り起こし、理論に裏付けされた表現によって芸術に転換するプロジェクト及びアートマネジメントの展開とその理論化に関する研究指導を行う。

（石倉 敏明）地域を捉える民族誌学的なアプローチと人類史における芸術の役割について考察する人類学的視点により、アート・デザイン・クラフトの三領域の交点に位置する価値創造についての理論化と、実践と思考の相互作用についての研究指導を行う。

（唐澤 太輔）粘菌をはじめとする自然現象の観察と夢やイメージ等の主観的・無意識的省察を複合した南方熊楠を対象とする生命論・宇宙論の視点から、研究テーマの性質や文脈に応じた論文の構成指導や、外的現実と内的現実を横断・複合する実践的方法論についての指導を行う。

履修上の注意

全体で行う発表などの他は、原則個人指導で行うため、2名の担当教員とよく相談し授業計画を立てること。

テキスト

授業内で必要となるテキストを適宜準備する。

参考書・参考資料等

授業内で必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する

学生に対する評価

個人指導での評価、研究制作や研究発表など、総合的に判断する。

授業科目名	複合芸術特別研究 I	担当教員名	尾登誠一、白杉悦雄、小田英之、藤浩志、岩井成昭、今中隆介、志邨匠子、岸健太、飯倉宏治、石倉敏明、萩原健一、服部浩之、唐澤太輔
授業科目区分	研究指導科目		
履修区分	必修	授業形態	演習
配当年次・学期	1年次通年	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ <p>本授業では、博士論文・博士制作に関する指導を面談形式で行いながら、(1) 研究テーマの設定・研究計画立案、(2) 論文研究・年次制作の実施、および(3) 報告書の提出という流れを通じて、博士論文・博士制作に繋げる研究テーマの設定と研究計画の立案、さらには、そのテーマに基づく研究・制作の中に新たな試みを加え、複合的視点に立脚した一定の成果を得るとともに、研究の方向を定めたいうえて、本格的な研究に着手することを目標とする。</p>			
授業の概要 <p>本授業は、研究テーマ発表、年次制作・研究の実施と発表、報告書の提出という段階から構成され、2年次の複合芸術特別研究Ⅱへ向けた準備段階と位置づけられる。</p> <p>1年次当初に、入学時に提出された研究計画に基づき主指導教員（副指導教員）を配置し、その後、学生の研究テーマ案を踏まえて、明確な研究テーマ設定と研究計画の立案に関する指導を行う。立案された研究計画書については、研究計画書審査会と研究科倫理審査会における審査を通じて、適切な助言・指導を行う。</p> <p>後期は、「複合芸術表現研究Ⅰ」および「複合芸術理論研究Ⅰ」における成果等を取込みつつ、学生が、主指導教員（副指導教員）と定期的に研究・制作のテーマや意図、内容や手法に関する相談と進捗状況の報告を行いながら研究を進める。なお、その過程では、必要に応じて「複合芸術表現研究Ⅰ」および「複合芸術理論研究Ⅰ」の担当教員との協議を行う。</p> <p>最終的には、年次の論文研究・制作を完了し、発表のうえて博士研究状況報告書を提出する。</p> <p>なお、主指導教員は、博士論文等提出資格をクリアするための論文の掲載、作品の出品等に留意した指導を行う。</p>			

授業計画

第 1 回 ガイダンス・主指導教員（副指導教員）の決定

第 2 回～ 3 回 研究テーマ設定、研究計画立案指導

第 4 回～ 7 回 研究テーマに基づく個別指導

第 8 回 研究計画書審査会、研究科倫理審査会

第 9 回～14 回 博士論文（テーマに基づき年次制作）の個別指導、定期的に進捗報告

第 15 回 博士研究状況報告会（報告書の提出）

指導教員の研究テーマを次のとおり

（尾登 誠一）機能デザインをベースとした総合的なデザイン論を踏まえて、科学と芸術、文明と文化という関係性の間にある価値基準を、精神と物質の相乗性として捉え、生活様式を軸にした多様な領域を横断しながら、モノ・コト、起業を含めた社会そのものを対象とする表現行為であるソーシャルデザインに関する研究指導を行う。

（白杉 悦雄）現代芸術を中国科学史、中国及び日本の医学思想史、博物学、身体論、哲学等の視点に照らしながら、論理的な分析、哲学的課題の解釈、古典著作の読解など通じた複合芸術の理論化・体系化に関する研究指導を行う。

（小田 英之）ビジュアルアートの視点に複合の観点を加えながら対象を読み解いたうえで、絵画やイラストレーション、CGをベースとしたグラフィックデザインなどのメディアを効果的に活用した複合的手法を通じて、表現の拡張を試みる研究指導を行う。

（藤 浩志）立体造形やコミュニティアートなどの表現手法と、文化イベントやアートプロジェクトの実践を踏まえながら、そうした取り組みを複合の視点から解釈し、過去の常識や経験則にとらわれないアートプロジェクトの実践に関する研究指導を行う。

（岩井 成昭）現代芸術におけるリレーショナル・アートやソーシャリー・エンゲージド・アートなど、社会や地域に多様な価値をもたらすプロジェクト型アートを、その構成要素や構造に着目しながら理論的な裏付けをもって立案・展開していく手法に関する研究指導を行う。

（今中 隆介）モノを作る表現行為が、アート、デザイン、エンジニアリング、サイエンスの統合（複合）によって成り立っていることを踏まえ、プロダクトデザインやものづくり、社会を俯瞰するデザイン思考に基づく制作・提案やプロジェクトの組成・実践に関する研究指導を行う。

（志邨 匠子）刻々と変化している現代芸術を、美術史研究の視点から学際的、多元的に考察することで芸術表現への新しい視座を与えるとともに、本学の「複合芸術」が対象とする多様な試みを含めて、その成果検証と理論形成に関わる研究指導を行う。

（岸 健太）地域や企業を含むコミュニティを対象として、それらを構成する多様な要素の動的な相関に着目し、アーバン・スタディーズの視点から、プロジェクトなどの不断に変化する表現の可能性と、それらを裏付ける仮説・検証を通じた表現と理論の具体化に関する研究指導を行う。

（飯倉 宏治）情報科学の視点から、ITと芸術の複合による新しい表現や概念、考え方を掘り下げることで、情報技術の高度な活用と芸術の間に生まれる未知の表現領域の拡張と理論化に関する研究指導を行う。

(萩原 健一) 対象物や対象地域に応じた映像表現の複合的な活用を通じて、メディアによる地域・人・事柄をつなぐ可能性を探究し、その際に生じる「新しい例外」にも着目しながら、従来とは異なる地域課題の解決手法や表現領域の拡張に関する研究指導を行う。

(服部 浩之) キューレーションの視点から、無意識な行為の意識化などを通じて、社会の中で新たな視点や価値を掘り起こし、理論に裏付けされた表現によって芸術に転換するプロジェクト及びアートマネジメントの展開とその理論化に関する研究指導を行う。

(石倉 敏明) 地域を捉える民族誌学的なアプローチと人類史における芸術の役割について考察する人類学的視点により、アート・デザイン・クラフトの三領域の交点に位置する価値創造についての理論化と、実践と思考の相互作用についての研究指導を行う。

(唐澤 太輔) 粘菌をはじめとする自然現象の観察と夢やイメージ等の主観的・無意識的省察を複合した南方熊楠を対象とする生命論・宇宙論の視点から、研究テーマの性質や文脈に応じた論文の構成指導や、外的現実と内的現実を横断・複合する実践的方法論についての指導を行う。

履修上の注意

全体で行う発表などの他は、原則個人指導で行うため、主・副指導教員とよく相談し授業計画を立てること。

テキスト

指導に際して必要となるテキストを適宜準備する。

参考書・参考資料等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する

学生に対する評価

個人指導での評価、研究制作や研究発表など、総合的に判断する。

授業科目名	複合芸術特別研究Ⅱ	担当教員名	尾登誠一、白杉悦雄、小田英之、藤浩志、岩井成昭、今中隆介、志邨匠子、岸健太、飯倉宏治、石倉敏明、萩原健一、服部浩之、唐澤太輔
授業科目区分	研究指導科目		
履修区分	必修	授業形態	演習
配当年次・学期	2年次通年	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ <p>本授業では、博士論文・博士制作に関する指導を面談形式で行いながら、研究指導を担当する主指導教員と副指導教員による複数体制で学生の研究・制作の指導に当たる。</p> <p>「複合芸術特別研究Ⅰ」の中で定められた研究テーマや研究計画に基づき実施した年次制作・研究、および提出された報告書の内容を踏まえて、本授業では、引き続き研究計画に基づき、後期に開催する博士論文等予備審査会、年度末に開催する第1回公開発表会での研究成果のプレゼンテーションに向けて、博士論文・博士制作の研究を進める。そして、3年次に提出する博士論文・博士制作における高度な提案への結実を目指し、自らの研究・制作をより一層発展・深化させることを目標とする。</p>			
授業の概要 <p>2年次に行う本授業では、研究計画に基づき論文・制作に関する研究を進めながら、前期は後期に開催する博士論文等予備審査会に向けて、研究成果を取りまとめる。その取りまとめに当たっては、指導教員と研究・制作のテーマ、内容、実践手法等について定期的に報告・相談を行うとともに、同時に取り組む「複合芸術表現研究Ⅱ」および「複合芸術理論研究Ⅱ」の経験と成果を反映させるため、必要に応じて「複合芸術表現研究Ⅱ」および「複合芸術理論研究Ⅱ」の担当教員と協議を行う。</p> <p>その後は、博士論文等予備審査会での助言・指導を踏まえて、年度末に開催する第1回公開発表会での研究成果の中間発表に向けて、さらに研究を深化させる。</p> <p>最終的には、公開発表会での課題指摘や助言を踏まえて研究の改善を進め、博士課程最終学年である3年次への準備を整える。</p> <p>なお、主指導教員は、博士論文等提出資格をクリアするための論文の掲載、作品の出品等に留意した指導を行う。</p>			

授業計画

第 1 回～ 7 回 博士論文（テーマに基づき年次制作）の個別指導、定期的に進捗報告

第 8 回 主査・副査の決定

第 9 回～10 回 博士論文等予備審査会

第 11 回～14 回 博士論文（テーマに基づき年次制作）の個別指導、定期的に進捗報告

第 15 回 第 1 回公開発表会

指導教員の研究テーマを次のとおり

（尾登 誠一）機能デザインをベースとした総合的なデザイン論を踏まえて、科学と芸術、文明と文化という関係性の間にある価値基準を、精神と物質の相乗性として捉え、生活様式を軸にした多様な領域を横断しながら、モノ・コト、起業を含めた社会そのものを対象とする表現行為であるソーシャルデザインに関する研究指導を行う。

（白杉 悦雄）現代芸術を中国科学史、中国及び日本の医学思想史、博物学、身体論、哲学等の視点に照らしながら、論理的な分析、哲学的課題の解釈、古典著作の読解など通じた複合芸術の理論化・体系化に関する研究指導を行う。

（小田 英之）ビジュアルアートの視点に複合の観点を加えながら対象を読み解いたうえで、絵画やイラストレーション、CGをベースとしたグラフィックデザインなどのメディアを効果的に活用した複合的手法を通じて、表現の拡張を試みる研究指導を行う。

（藤 浩志）立体造形やコミュニティアートなどの表現手法と、文化イベントやアートプロジェクトの実践を踏まえながら、そうした取り組みを複合の視点から解釈し、過去の常識や経験則にとらわれないアートプロジェクトの実践に関する研究指導を行う。

（岩井 成昭）現代芸術におけるリレーショナル・アートやソーシャリー・エンゲージド・アートなど、社会や地域に多様な価値をもたらすプロジェクト型アートを、その構成要素や構造に着目しながら理論的な裏付けをもって立案・展開していく手法に関する研究指導を行う。

（今中 隆介）モノを作る表現行為が、アート、デザイン、エンジニアリング、サイエンスの統合（複合）によって成り立っていることを踏まえ、プロダクトデザインやものづくり、社会を俯瞰するデザイン思考に基づく制作・提案やプロジェクトの組成・実践に関する研究指導を行う。

（志邨 匠子）刻々と変化している現代芸術を、美術史研究の視点から学際的、多元的に考察することで芸術表現への新しい視座を与えるとともに、本学の「複合芸術」が対象とする多様な試みを含めて、その成果検証と理論形成に関わる研究指導を行う。

（岸 健太）地域や企業を含むコミュニティを対象として、それらを構成する多様な要素の動的な相関に着目し、アーバン・スタディーズの視点から、プロジェクトなどの不断に変化する表現の可能性と、それらを裏付ける仮説・検証を通じた表現と理論の具体化に関する研究指導を行う。

（飯倉 宏治）情報科学の視点から、ITと芸術の複合による新しい表現や概念、考え方を掘り下げることで、情報技術の高度な活用と芸術の間に生まれる未知の表現領域の拡張と理論化に関する研究指導を行う。

（萩原 健一）対象物や対象地域に応じた映像表現の複合的な活用を通じて、メディアによる地域・

人・事柄をつなぐ可能性を探究し、その際に生じる「新しい例外」にも着目しながら、従来とは異なる地域課題の解決手法や表現領域の拡張に関する研究指導を行う。

（服部 浩之）キュレーションの視点から、無意識な行為の意識化などを通じて、社会の中で新たな視点や価値を掘り起こし、理論に裏付けされた表現によって芸術に転換するプロジェクト及びアートマネジメントの展開とその理論化に関する研究指導を行う。

（石倉 敏明）地域を捉える民族誌学的なアプローチと人類史における芸術の役割について考察する人類学的視点により、アート・デザイン・クラフトの三領域の交点に位置する価値創造についての理論化と、実践と思考の相互作用についての研究指導を行う。

（唐澤 太輔）粘菌をはじめとする自然現象の観察と夢やイメージ等の主観的・無意識的省察を複合した南方熊楠を対象とする生命論・宇宙論の視点から、研究テーマの性質や文脈に応じた論文の構成指導や、外的現実と内的現実を横断・複合する実践的方法論についての指導を行う。

履修上の注意

全体で行う発表などの他は、原則個人指導で行うため、主・副指導教員とよく相談し授業計画を立てること。

テキスト

指導に際して必要となるテキストを適宜準備する。

参考書・参考資料等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する

学生に対する評価

個人指導での評価、研究制作や研究発表など、総合的に判断する。

授業科目名	複合芸術特別研究Ⅲ	担当教員名	尾登誠一、白杉悦雄、小田英之、藤浩志、岩井成昭、今中隆介、志邨匠子、岸健太、飯倉宏治、石倉敏明、萩原健一、服部浩之、唐澤太輔
授業科目区分	研究指導科目		
履修区分	必修	授業形態	演習
配当年次・学期	3年次通年	単位数	4単位
授業の到達目標及びテーマ <p>本授業では、博士論文・博士制作に関する指導を面談形式で行いながら、研究指導を担当する主指導教員と副指導教員による複数体制で学生の研究・制作の指導に当たる。</p> <p>「複合芸術特別研究Ⅰ・Ⅱ」において実施した年次制作・研究、提出された報告書、博士論文等予備審査、第1回公開発表会の内容、さらには、同時並行的に行ってきた「複合芸術表現研究Ⅰ・Ⅱ」および「複合芸術理論研究Ⅰ・Ⅱ」での成果を踏まえて、後期の博士論文等審査会、年度末の第2回公開発表会に向けて、博士論文・博士制作の研究を進める。そして、自らの研究・制作を複合的視点から既存の領域や価値観にとらわれない学術的・社会的に大きな価値を持つ博士論文及び研究作品という研究成果として結実させることを目標とする。</p>			
授業の概要 <p>3年次に行う本授業では、博士研究の最終年度として、博士論文及び研究作品（研究作品については研究領域により必要な場合に限る。）を提出し、後期の博士論文等審査会と年度末の第2回公開発表会を通じた指導・助言に対応しながら、研究成果としてまとめる。</p> <p>前期は、博士論文等審査会に向けて、指導教員による定期的な指導のもと、博士論文を完成させる。併せて、研究作品を伴う場合は、同様に指導教員のもとで並行して制作を進める。</p> <p>履修者は、指導教員と定期的な報告・相談を行いながら、3年間の全ての授業の成果を持って博士論文及び研究作品を完成させ、審査・発表に臨む。</p>			
授業計画 <p>第1回～10回 博士論文（テーマに基づき年次制作）の個別指導、定期的に進捗報告</p> <p>第11回～15回 博士論文の執筆、作品の制作の進捗チェック</p> <p>第16回 博士論文等審査委員会への博士論文及び研究作品の提出</p> <p>第17回～24回 博士論文（テーマに基づき年次制作）の個別指導、定期的に進捗報告</p> <p>第25回～28回 公開発表会に向けた最終調整</p> <p>第29回～30回 第2回公開発表会</p> <p>指導教員の研究テーマを次のとおり</p> <p>（尾登 誠一）機能デザインをベースとした総合的なデザイン論を踏まえて、科学と芸術、文明と文化という関係性の間にある価値基準を、精神と物質の相乗性として捉え、生活様式を軸にした多様な領域を横断しながら、モノ・コト、起業を含めた社会そのものを対象とする表現行為であるソー</p>			

シャルデザインに関する研究指導を行う。

（白杉 悦雄）現代芸術を中国科学史、中国及び日本の医学思想史、博物学、身体論、哲学等の視点に照らしながら、論理的な分析、哲学的課題の解釈、古典著作の読解など通じた複合芸術の理論化・体系化に関する研究指導を行う。

（小田 英之）ビジュアルアートの視点に複合の観点を加えながら対象を読み解いたうえで、絵画やイラストレーション、CGをベースとしたグラフィックデザインなどのメディアを効果的に活用した複合的手法を通じて、表現の拡張を試みる研究指導を行う。

（藤 浩志）立体造形やコミュニティアートなどの表現手法と、文化イベントやアートプロジェクトの実践を踏まえながら、そうした取り組みを複合の視点から解釈し、過去の常識や経験則にとらわれないアートプロジェクトの実践に関する研究指導を行う。

（岩井 成昭）現代芸術におけるリレーショナル・アートやソーシャリー・エンゲージド・アートなど、社会や地域に多様な価値をもたらすプロジェクト型アートを、その構成要素や構造に着目しながら理論的な裏付けをもって立案・展開していく手法に関する研究指導を行う。

（今中 隆介）モノを作る表現行為が、アート、デザイン、エンジニアリング、サイエンスの統合（複合）によって成り立っていることを踏まえ、プロダクトデザインやものづくり、社会を俯瞰するデザイン思考に基づく制作・提案やプロジェクトの組成・実践に関する研究指導を行う。

（志邨 匠子）刻々と変化している現代芸術を、美術史研究の視点から学際的、多元的に考察することで芸術表現への新しい視座を与えるとともに、本学の「複合芸術」が対象とする多様な試みを含めて、その成果検証と理論形成に関わる研究指導を行う。

（岸 健太）地域や企業を含むコミュニティを対象として、それらを構成する多様な要素の動的な相関に着目し、アーバン・スタディーズの視点から、プロジェクトなどの不断に変化する表現の可能性と、それらを裏付ける仮説・検証を通じた表現と理論の具体化に関する研究指導を行う。

（飯倉 宏治）情報科学の視点から、ITと芸術の複合による新しい表現や概念、考え方を掘り下げることで、情報技術の高度な活用と芸術の間に生まれる未知の表現領域の拡張と理論化に関する研究指導を行う。

（萩原 健一）対象物や対象地域に応じた映像表現の複合的な活用を通じて、メディアによる地域・人・事柄をつなぐ可能性を探究し、その際に生じる「新しい例外」にも着目しながら、従来とは異なる地域課題の解決手法や表現領域の拡張に関する研究指導を行う。

（服部 浩之）キューレーションの視点から、無意識な行為の意識化などを通じて、社会の中で新たな視点や価値を掘り起こし、理論に裏付けされた表現によって芸術に転換するプロジェクト及びアートマネジメントの展開とその理論化に関する研究指導を行う。

（石倉 敏明）地域を捉える民族誌学的なアプローチと人類史における芸術の役割について考察する人類学的視点により、アート・デザイン・クラフトの三領域の交点に位置する価値創造についての理論化と、実践と思考の相互作用についての研究指導を行う。

（唐澤 太輔）粘菌をはじめとする自然現象の観察と夢やイメージ等の主観的・無意識的省察を複合した南方熊楠を対象とする生命論・宇宙論の視点から、研究テーマの性質や文脈に応じた論文の構

成指導や、外的現実と内的現実を横断・複合する実践的方法論についての指導を行う。

履修上の注意

全体で行う発表などの他は、原則個人指導で行うため、主・副指導教員とよく相談し授業計画を立てること。

テキスト

指導に際して必要となるテキストを適宜準備する。

参考書・参考資料等

指導に際して必要となる参考書・参考資料は適宜紹介する

学生に対する評価

個人指導での評価、研究制作や研究発表など、総合的に判断する。